

～ 自然とともに 川漁師のムラに生まれて ～

みつ兄・カッパのみっちゃん

四万十市三里の岡村三男さん(昭和6年生まれ)は、流域でも名うての川漁師だ。地元では「みつ兄」と呼ばれている。岡村さんは、中村山内家の第二家老・加用内記を先祖に頂く家系に生まれた。中村山内家三代・豊明が将軍徳川綱吉の怒りに触れて改易(家を取り潰されること)になったとき、先祖たちは野にくだり、三里まで来た。そこで、「魚もようけおるし、ここで漁師になろう。」と暮らし始めた岡村さんは伝え聞いている。それ以来、加用の子孫たちは、代々川漁をなりわいとして暮らしてきた。

岡村さんは、川漁師の家系に生まれ、父の音次さんに川漁を仕込まれる。音次さんは素潜りの達人で、その血を継いだ岡村さんもスム(潜る)のが得意だった。3分でも4分でも平気で潜った。友人の目の前で4尺もの鯉を“抱き獲り”してみせたこともある。「カッパのみっちゃん」と呼ばれる由縁である。「兄貴が二人とも戦争にとられとったけんね。学校を出て漁師になって、親父と毎日一緒に川の上で暮らし、漁一本で食うてきた。夏の昼は地曳き網、夜は洸巻き(火振り漁)、冬の間は下田にボウを獲りにいきよった。」そこで、川で生きていくための様々な知識を音次さんから仕込まれた。「親父はえらかった(すごかった)ぜ。洸巻きから帰る船の上で『控えておれよお』言いもって銚子を投げて、10メートル先のスズキを外すことなく獲った。親父にはかなわん。」岡村さんは今でもそういう。その音次さんから「自然に従わんといかん」「自然の摂理によって生活をせよ」と教えを受けた岡村さんの口癖は「自然とともに(一緒)よね。」である。



もくせい

木犀の花がにおったら...

岡村さんが育った三里の島の宮には、川で生きていくための様々な言い伝えが残されていた。それはまさに、四万十の厳しい自然の中で人間がいかに生き抜いていくか、その知恵の集合体だった。植物の状態等で時機を知る「自然暦」もその一つだ。ネコヤナギが咲いたらゴリの立簀漁を始め、イタドリの花が咲いたら蟹籠を浸けた。ホゼ(彼岸花)が咲いたら鮎が下ると言って地引き網を引き、雪汁(雪解け水)を呑むと鯉が眠るといって舟を出して鯉を突いた。

その中でも島の宮の人たちが秘中の秘として護ってきた口伝がある。

「これはうちんくに伝わる秘中の秘やけど、もうかまん。僕で最後やけん。ウチの庭に銀木犀の木があるろ。あの花がかすかににおったら、鮎は瀬の肩で一晩泊まりをする。『一番付き』いうて、(産卵のための)瀬付きを始める。その瀬は、棹したらズルーっとめり込でいくような小石と砂混じりの瀬よ。モーターにのっちゃったら分からん。オン(雄)が先に立って、メン(雌)が後ろについちよる。それから2・3日して木犀がきつうにおい出したら、一晩泊まりの大群がどっと瀬に付く。こういうときはえらい漁をするぜ。」



銀木犀の花

みつ兄の夢

「今、都会から来た人たちが四万十の風景を見て、褒めてくれる。いいと言ってくれる。その景色は、昔の人が何代にもわたってコツコツ造り上げた努力のたまものよね。昔の人は、母さんが腹に子供を宿したら、その子の食い分といって土地を造った。それも機械がある訳じゃない、川原からもってきた玉石をついて、そりゃすごい労力よ。昔の人がそんな死ぬるような思いをして創り上げたものを、今の人は金のために平気で壊してしまう。それは結局自らの身を滅ぼすことになりはせんか。」

岡村さんは村の言い伝えをとぎれさせてはならないと、趣味の絵を活かして絵巻物を制作した。「高いもんやね。京都の装丁屋に頼んだら10万とられたぜ。」岡村さんは笑う。絵巻には囲炉裏の端でおんちゃんたちに聞いた昔の話が描きこまれている。「雲つえ」という雲の底が抜けたような恐ろしい豪雨のこと、皆泣きながら流されていったと伝えられる大水害のこと、そして、伝え聞いた話から復元したかつての村の姿。



岡村さんの現在の夢は、家の沖に眠る三里の遺跡に日の目を見せることだ。「昭和54年に試掘したとき、当時の文化庁の調査官に『四国で第一級の縄文遺跡』とお墨付きをもらうたがやけんね。縄文だけやない。青磁も古伊万里も出ちょうがやけん。これをどうしても掘ってもらわないかん。四万十には自然はある。けど文化的なものがない。このままではこの集落も廃れるばかりよ。何とか若いもんが働ける場所をかまえないかん。人に来てもらえるようにせないかん。」80才を越えても、岡村さんの意気はあがるばかりである。

お知らせ

今回ご紹介した岡村三男さんの話の聞き書きが、今年2月上梓されました。

永沢正好著「岡村三男翁聞書 川は生きちよる 一四万十川に暮らすー」大河書房 ￥3800

流域トピックス 「大正中津川集落の人と自然が共生する地域づくり協定」締結



8月23日(金) 高知県と四万十町、四万十町大正中津川地区との間で「大正中津川集落の人と自然が共生する地域づくり協定」が締結されました。この協定は「豊かな清流や優れた自然環境と景観を有する地区と自然との共生」をキーワードに、地域住民と行政とが環境保全・地域振興の取組みを協働して行なう協定で、四万十川流域ではしまんと黒尊むら(H18締結)に続いて2例目です。中津川地区のこれからにご注目ください。